

コメディリリック第6回「ラブラブチャレンジャー」

「インフルエンサー」

登場人物

畑岡

畑中タメ

高杉

ペイリー・チャイルド

齋藤

野彦

※畑岡、板付き

【し・明転】

※齋藤、登場

齋藤 「すいません！遅くなりました！」

畑岡 「馬鹿野郎！何遅刻してんだよ！」

齋藤 「すいません…」

※高杉、登場

高杉 「すいません！寝坊しました！」

畑岡 「うん。おはよー。よろしくねー」

※高杉、はける

齋藤 「え」

畑岡 「齋藤！てめーは社会人としての意識が足りてないんだよ！」

齋藤 「待ってください」

畑岡 「誰が待つか！遅刻したお前に人権何か無いんだよ！」

齋藤 「待ってくださいよ！…え、何で俺はこんなに怒られて、高杉さんは怒られないんですか？」

畑岡 「うるさい！この！この！（殴る）」

齋藤 「パワハラ、パワハラ！」

畑岡 「訴えられるもんなら訴えてみるよ！パワハラも一周廻って色々わかんなくなっちゃまってからな！死ぬ！死ぬ（殴る）」

齋藤 「無茶苦茶だよ！」

畑岡 「無茶苦茶だよ！」

※高杉、登場

高杉 「課長、会議の資料、家に忘れて…」

畑岡 「うん。大丈夫だよー」

※高杉、はける

齋藤 「いや、何で！？説明してくださいよ！」

畑岡 「俺の中で完全に人権の無いお前に何で説明しなきゃいけないの？」

齋藤 「前はそんなことなかったじゃないですか！」

畑岡 「前はそんなことなかったじゃないですか！」

畑岡

「…高杉君のツイッターのフォロワーが5万人だから」

齋藤

「え？」

畑岡

「高杉君のツイッターのフォロワーが5万人だからだよ」

齋藤

「そんな理由ですか？」

畑岡

「そんな理由って…彼は5万の戦力を持つてるってことだぞ!？」

齋藤

「戦力？」

畑岡

「俺は恐ろしいんだよ…高杉君の機嫌を損ねたら、5万の軍勢が俺のローン35年のマイホームを破壊しに来るんじゃないかって…」

齋藤

「来るわけないでしょ」

畑岡

「5万と言わないにしても彼だったら…いいねを押した1000人…少なくとも100人がすぐに俺の家に…」

※高杉、登場

高杉

「課長」

畑岡

「(ビクついて)んーどうしたの?」

高杉

「吉田商事の白石さんから、来週打ち合わせがしたいと問い合わせが来まして」

畑岡

「私が行きましょう」

高杉

「よろしくお願い致します!」

※高杉、はける

畑岡

「35年ローンで建てた俺のマイホームなんか彼のフォロワーの手にかかれば秒殺なんだよ…下手な態度取れない」

齋藤

「考え過ぎでしょ」

畑岡

「彼のツイッターに俺の悪口書かれたら…我が一族は終わりだ」

齋藤

「なわけないから」

畑岡

「逆に!逆にだ、彼がツイッターで俺を褒めてくれたら俺のインフルエンサーとなり…何かいいことあるかもしれない」

齋藤

「無い無い無い。課長、間違ってますよ。実生活にSNSが関係してくる人間なんかごく一部ですよ?」

畑岡

「お前ツイッターやってる?」

齋藤

「やってますよ」

畑岡

「フォロワー何人?」

齋藤

「え、80人くらいですけど」

畑岡

「フォロワー80人の奴がツイッター語ってんじゃないか?」

齋藤

「課長は何人フォロワーいるんすか?」

畑岡

「俺は550人だ」

齋藤 「マジかよ」

畑岡 「フオローは2000人してるけど」

齋藤 「あ、やべー人だ！やべー人のツイッタ
ーだ！」

畑岡 「とにかく、俺はこれからも差別してく
からな！高杉君に媚びへつらい、その分
のストレスをお前にぶつけていく」

齋藤 「最悪だよー」

※高杉、登場

高杉、タメ息

畑岡 「高杉君、どうしたの？」

高杉 「いやー俺ツイッターやってるんですけ
ど」

畑岡 「え…そう、なん、だー」

高杉 「何か疲れちゃってやめようかなって」

畑岡 「え、何で？勿体ないよ！」

高杉 「いやーなんかやってて時間取られてる
ことに気づいて、あると触っちゃうか
ら、アカウント消しちゃおうかなーっ
て」

畑岡 「えーそうなんだ…あ、アカウント消す
前にさ、俺のこと褒めてくれない？」

高杉 「え？課長を？」

畑岡 「うん。俺のインフルエンサーとなつて
さ、何かうちの畑岡課長素晴らしいみた
いな感じで褒めてよ。顔出しもするよ」

高杉 「別にいいですけど…本当にします？」
「頼むよ！」

畑岡を撮影する高杉

齋藤 「プライドも何もないな…」

畑岡 「うるせーな！地位が上がったら今の倍
パワハラかましてやるからな！」

高杉 「眩きましたよ」

畑岡 「どう？」

高杉 「どうって言われても…あ、コメント来
ましたよ「昔、この人が隣に住んで下
着盗まれたことある」って」

畑岡 「下着何か盗んだことないよ！」

高杉 「「デリヘルで働いてた時に本番強要し
てきた」って」

齋藤 「そうなんですか？」

畑岡 「風俗で遊んだことないよ！」

高杉 「「うちの犬に変なもの食わせてそのせ
いで下痢になった」」

畑岡 「やっけない！」

齋藤 「大丈夫ですか？これ？」

高杉

「「渋谷のツタヤの前でいつもうろろろしてる不審者」「私の犬に変なもの食わせた人っぼい」「うちの店で食い逃げした人だ」「俺のロードバイクを盗んで捕まった人に似てる」「目を離してる隙にうちの犬に変なもの食わせた」「乃木坂の握手会の時にトラブル起こしてたおっさんだ」「中野のセブンでおでんつんつんしてた」「うちのワンちゃんに変なもの食わせたおっさんに似てる」「うちのチワワに変なもの食べさせた人。すぐ通報した」」

畑岡

「（言われながら色々繰り返す）違う！違う！違う！違う！えー！えー！えー！」

齋藤

「課長……」

「本当に違うよ！やってないことばかりだよ！」

齋藤

「こっわ」

高杉

「課長、訂正しておきますか？」

畑岡

「お願いします」

高杉

「課長、他人のペットに変なもの食わせてたつてのは本当ですか？」

畑岡

「それは本当」

齋藤

「こっわ！」

【し・暗転】

——了——